

安曇野市版  
レッドデータブックシンポジウム  
—— レポート ——

平成26年10月18日開催



## 目次

1 シンポジウム概要.....	1
2 基調講演及びパネルディスカッション要旨.....	3
(1) 基調講演.....	3
(2) パネルディスカッション.....	7
(3) 質疑応答・意見交換.....	11

# 1 シンポジウム概要

---

本シンポジウムは、「安曇野市版レッドデータブック」の発刊を記念し、市民のみなさんにこのレッドデータブックの普及啓発、また市の自然環境を再発見していただくことを目的に開催されました。

元安曇野市版レッドデータブック作成委員の皆様を講師、パネリストに迎え、それぞれの立場から、安曇野市版レッドデータブックの意義、市内の大切にしていきたい生きものや自然環境、その保全のための方法、レッドデータブックの作成により見えてきた課題、レッドデータブックの今後の活用方法についてお話しいただき、来場者されたみなさんと今抱えている市の自然環境の問題とその方策について、意見交換が行われました。

項目	内容
名称	安曇野市版レッドデータブックシンポジウム
主催	安曇野市
後援	長野県、長野県教育委員会、安曇野市教育委員会、信濃毎日新聞社、市民タイムス、ANC あづみ野テレビ、あづみ野エフエム
日程	平成26年10月18日(土) 13:00 ~ 16:00 (12:30開場)
場所	安曇野市穂高交流学習センター「みらい」多目的交流ホール (安曇野市穂高6765番地2)
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基調講演 『レッドデータブック作成から見えてきた安曇野市の自然環境の現状と課題』 吉田 利男 (信州大学名誉教授)</li> <li>・パネルディスカッション 『安曇野市の自然環境をみんなでどう守るか』 コーディネーター： 中村 寛志 (信州大学農学部教授)</li> <li>パネリスト： 植松 晃岳 (野生生物資料情報室) 浅川 行雄 (安曇野市環境審議会) 飯沼 冬彦 (安曇野市環境審議会) 横内 文人 (長野県植物研究会) 北野 聡 (長野県環境保全研究所) 東城 幸治 (信州大学理学部准教授) 那須野 雅好 (安曇野市教育委員会教育部文化課 課長)</li> <li>・パネル展示</li> <li>・レッドデータブック販売</li> </ul>
参加者数	一般来場者 約100名

## 2 基調講演及びパネルディスカッション要旨

### (1) 基調講演

[講演者] 吉田 利男 (信州大学名誉教授)

[タイトル] 『レッドデータブック作成から見えてきた安曇野市の自然環境の現状と課題』

- ・市内の自然環境の現状と課題
- ・求められる今後の取組

[要旨]

#### a. 自己紹介

信州大学名誉教授。平成 23 年から安曇野市版レッドデータブック作成委員会にて委員長を務め、レッドデータブック作成に中心的に関わってきた。

先に塩尻市が「塩尻市の残したい自然」というレッドデータブックを作成し、残したい地域として 16 か所が選定され、その地域の特性を生かして自然を残そうとする努力がみられた。これは今までにないユニークな取組だと感じており、安曇野市でも同じような取組ができればと常々思っていた。



#### b. レッドデータブックとは

- ・ 絶滅の危機にある野生動植物をリストアップし一種ごとに解説した本である。
- ・ 何かの影響で、個体数あるいは分布地域が減ってきており、この先その種が絶滅の危機にあるものを (既に絶滅してしまった種も含め)、段階を決めて選定している。
- ・ 一度絶滅したものを、飼育・栽培して、再び自然界に放された種は、「野生絶滅」として対応している (サケ、ニホンウナギなど)。

#### c. 安曇野市の自然の特性

- ・ 安曇野市は、長い年月の中で人と自然が様々な関わりを持ってきている。西側にはアルプス高山帯を有した特色がある。四季を通して山の移り変わりを楽しみ、アルプスの残雪の形の変化で、その時々々の農作業の時期を判断してきた。

- 安曇野市は、高山帯、亜高山帯、里山と呼ばれる山地帯、平地からなり、水瓶としての湧水群がある。
- 湧水河川三川合流地帯は、サケやマスが遡上してくる重要なルートとなっていたが、現在はダムができ、遡上出来なくなってしまった。

#### d. 安曇野市の自然環境と人との関わり

- 時代の変遷とともに、人と自然の接点が平地から山地へ上がっていき、山との関わりをより持つようになっていった。また平地では、川から農地に水を供給するために、水獲得の戦略により山を切り開くなど自然を変えてきた。

#### e. 安曇野市の重要な自然環境

- 高山帯・亜高山帯を紹介。西側には標高 2,000m を超す北アルプス前山の山々があり、夏の 3~4 か月間に高山植物は花を咲かせる。気象環境が厳しく、偏西風により日本海から水分が運ばれ、雨や雪が多く降る。
- 山地帯を紹介。標高 700m~1,600m の山地帯では、人々の手が加わり、開拓が進んだ。本来はブナ林がみられるのだが、ほとんど伐採されてしまい、現在は二次林として再生し、カラマツ、シラカバ、クリ、ミズナラなどの落葉広葉樹林になっている。
- 東側には標高 1,000m ほどの長峰山がある。
- 山麓・平野部の写真を紹介。
- 河川・水辺を紹介。北側には高瀬川、南側には梓川、中央部には烏川、中房川が流れる。梓川は、松本市島内付近で奈良井川と合流し犀川と名前を変え、明科付近で犀川と、高瀬川、烏川、中房川（穂高川）が合流している。

#### f. 絶滅のおそれのある野生生物（レッドリスト種）

- カテゴリーの説明
- 安曇野市版レッドリスト選定状況の説明。安曇野市に生育する植物は 3,500 種で、その中の 342 種がレッドリスト種。動物は、脊椎動物が 350 種ほど、無脊椎動物は約 4,000 種以上が生息する中、332 種がレッドリストにあげられている。絶滅種の代表的なものは、オオカミやタガメなどである。

#### g. 土地利用の変化

- 安曇野市の土地利用の変遷の地図（1910 年代、1930 年代、1960 年代、1990 年代のもの）を説明。

- 30年代頃までは東側の山地帯は桑などの採草地だったが、60年代に入り農薬や薬品の投入や化学繊維が出始め、蚕を飼う状況ではなくなり草地もなくなっていった。
- 90年代に入り、山地帯にゴルフ場などの造成地が増えている。また東側の山に高速道路が通ったことで、野生生物の生息・生育場所が南北に分断されてしまった。
- 安曇野市の絶滅のおそれのある野生生物（写真で紹介）
- 植物－ササユリ（絶滅危惧Ⅰ類）、カワヂシャ（絶滅危惧Ⅰ類）、サイカチ（準絶滅危惧）
- 動物－カワネズミ（準絶滅危惧）、オコジョ（準絶滅危惧）、ライチョウ（絶滅危惧Ⅰ類）、ヤマセミ（絶滅危惧Ⅱ類）、シロマダラ（情報不足）、トノサマガエル（準絶滅危惧）、ニホンウナギ（野生絶滅）、サケ（野生絶滅）
- 昆虫－タガメ（絶滅）、オオルリシジミ（絶滅危惧Ⅰ類）、ゲンジボタル（絶滅危惧Ⅱ類）、ムカシトンボ（準絶滅危惧）

#### h. 注意すべき生物（写真で紹介）

- 植物－アレチウリ（特定外来生物）、オオカワヂシャ（特定外来生物）、オオキンケイギク（特定外来生物）、シンジュ
- 動物－ブラウントラウト（要注意外来生物）、オオクチバス（特定外来生物）、コモチカワツボ、ウチダザリガニ（特定外来生物）、ニホンジカ

#### i. 安曇野市の自然環境の現状と課題

- 人間活動や開発による危機
- 里地・里山周辺の人間活動の縮小による危機
- 人間により持ち込まれたものによる危機（例えば、コンクリート水路、外来生物）
- 地球温暖化による生物多様性への影響

#### j. 自然環境を守り、回復させるための方策

- 開発行為をおこなう際の配慮－開発の際、その場所にどのような生物がいるか、どうすれば開発に伴うリスクを低くできるか市や業者の配慮が必要。
- レッドリスト種の保全活動
- 里地里山環境の荒廃を防ぐ取組
- 注意すべき生物の駆除や分布拡大防止
- 普及啓発活動
- 調査・研究

k. 自然環境を守るための体制づくり

- 市、事業者、市民・市民団体、有識者が情報を共有し、協力して取り組む。

l. 自然環境を守り、回復させるために市民一人ひとりが取り組めること

- 知る－身近にどんな生物がいるか調べる。自然観察会へ参加する。
- 守る－自然環境の保全活動の外来生物の駆除活動等に参加する。自然環境や野生生物に関する法律やルールを守る。栽培・飼育していた生物を野外に放たないようにする（例えば、ゼニガメ（ミシシippiaカミミガメ）など）。
- 広める－わかったことは、周りに伝える。家族や友人等と自然について語り合う。自然環境を大切にすることを育てる。



## (2) パネルディスカッション

-----  
[コーディネーター] 中村 寛志 (信州大学農学部教授)

[アドバイザー] 吉田 利男 (信州大学名誉教授)

[パネリスト] レッドデータブック作成委員

浅川 行雄 (安曇野市環境審議会)、飯沼 冬彦 (安曇野市環境審議会)、  
横内 文人 (長野県植物研究会)、北野 聡 (長野県環境保全研究所)、  
東城 幸治 (信州大学理学部准教授)、那須野 雅好 (安曇野市教育部文化  
課課長)、植松 晃岳 (野生生物資料情報室) ※欠席

[タイトル] 『安曇野市の自然環境をみんなでどう守るか』  
-----

### 1) 中村 寛志 教授

#### a. 自己紹介

専門は昆虫生態学で主に蝶の研究。研究フィールドは安曇野市を対象にしている。オオルリシジミの研究で安曇野市に週1回ほど来ていた。



### 2) 浅川 行雄 様 (自然環境全般を担当)

#### a. 地形・地質の特徴

- 地形—東側がなだらかな山地。中央部が平坦な盆地。西側が北アルプスを含む山岳地帯。一番高い場所と低い場所の標高差は2,400mほどでかなり高低差があるのが特徴。
- 地質—盆地の中央を南北に走るとされる糸魚川-静岡構造線で東西2つに分かれている。東側は、フォッサマグナと呼ばれる比較的新しい時代の地層。西側は、古い時代(中生代)の花崗岩と堆積岩でできている。また盆地西側は扇状地が発達している。
- 降水量—東から西側の山地に行くにしたがい増えている。
- 土地利用の変遷について説明。土地利用の変遷に伴って、そこに住んでいた生物の変化も読み取れる。

#### b. 自然環境に関わる人為的要因の変遷とレッドリスト種の減少要因 (グラフで説明)

- 環境区分と重要な自然環境を説明。

- 高山帯（3%）、亜高山帯（19%）、山地帯（34%）、山麓部・平野部（44%）の4つに分けられる。また重要な自然環境地域として、高山帯5か所、亜高山帯5か所、山地12か所、山麓部・平野部10か所、湧水地・水辺11か所を選定。

### c. 農耕地での希少種の維持管理例

- 土手の草刈りは大変な作業なので、除草剤をまいたり、草刈り機で刈り取る。以前は、ススキ、ワレモコウ、アキカラマツを残して草刈り機で刈り払っていたが、ある時変わった草を見つけ、それがスズサイコだとわかった。その後はさらに草刈りが大変になった。

## 3) 植松 晃岳 様（鳥類担当）※欠席の為、中村様よりコメントを紹介

安曇野市では250種ほどの鳥類が生息し、その中で33種がレッドリスト種。記載された鳥だけを守れば良いのではなく、鳥が生息できる環境全体にも目を向けることが重要。

### a. 守りたい生物と自然環境

- ライチョウ（絶滅危惧Ⅰ類）。日本では生息数1,700羽。安曇野市では、燕岳、常念、蝶ヶ岳にかけての稜線に生息。
- イカルチドリ（準絶滅危惧）。日本の水辺を代表する鳥。安曇野市に通年生息。その他、コアジサシ（絶滅危惧Ⅰ類）、クイナ（情報不足）も絶滅の危機にある。
- 犀川、高瀬川などの河川周辺、三川合流地帯周辺、三角島に多くの野鳥が生息。またハクチョウなどの渡り鳥も利用している。この地域の周辺農家や漁業関係者と意思疎通を図りながら、どのように保全し活用していくか検討が望まれる。

### b. 自然環境保全のために(2つの問題提起)

- ハクチョウや水鳥の餌付けの問題

ハクチョウは30年ほど前に突然に飛来し始めた鳥。すなわち、以前は生息していなかった鳥が、生息するようになったこともまた環境の変化と指摘される。野生生物に餌を与えることは、本当にハクチョウのことを考えてのことか、野生生物と関わるとはどういうことか考えながら対応していくことが必要ではないか。

- アカゲラの巣箱づくり

松枯れの被害対策として、松枯れの原因であるマツノザイセンチュウの媒介者であるマツノマダラカミキリを減らすため、アカゲラの巣箱作りが一部で行われている。ただアカゲラは、マツノマダラカミキリを食べるだけでなく、他の多くの昆虫も食べることから、アカゲラを増やすことは生態系のバランスを崩すことになりかねない。その巣箱作りが、どれほど効果があったのか、その検証はしっかりなされているのか。生物多様性の面からも巣箱作りは慎重に行うべきだと思われる。

#### c. 今後の課題

- 多くの鳥が減少しつつある。スズメやツバメなどの身近な鳥も減ってきており、手遅れにならないように、多くの人が生き物や自然環境に関心を持つことが重要ではないか。

#### 4) 飯沼 冬彦 様 (植物担当)

##### a. 守りたい生物

- オオアカウキクサ (絶滅危惧Ⅱ類)。その他の水草では、カワヂシャ (絶滅危惧Ⅰ類)。競合する外来種のおオカワヂシャが入ってきて駆除に苦労している。交雑も起こり遺伝子が乱れる恐れがある。
- キキョウ (絶滅危惧Ⅱ類)。農薬などの使用や採集により減少している。

##### b. 今後の課題

- 田畑のあぜ道や里山の自然を守っていくために多くの労力が必要である。

#### 5) 横内 文人 様 (植物担当)

##### a. 守りたい生物

- 帰化植物拡大による在来植物減少の現状を説明。
- 大きな河川が何本も流れており、広い河原には独特の植物が生息してきたが、大半が減少している。複数のダム建設によって下流の川の流れが安定したが、河原には帰化植物 (ニセアカシアやポプラなどの高木) が入り、他の植物との競合を嫌うカワラニガナ (絶滅危惧Ⅱ類) が急激に減少している。
- イヌノフグリ (絶滅危惧Ⅰ類) は、帰化植物のおオイヌノフグリなどに追われて減少している。

#### 6) 北野 聡 様 (魚類担当)

##### a. 守りたい生物

- 安曇野市では 11 種類の魚類がレッドリスト種に指定されている。ダムや河川改修による環境の変化がある。
- 例えば、スナヤツメ (準絶滅危惧)、ホトケドジョウ (絶滅危惧Ⅱ類)、サケ (野生絶滅)、アユ (野生絶滅) があげられる。

##### b. 今後の課題

- 淡水域の生物が生息できる空間を守ること。川の形状を繋がりのあるものに戻すこと。湧水地も大事にしていかなければならない。

## 7) 東城 幸治 様（昆虫類、その他脊椎動物担当）

### a. 安曇野市の地史からみた生物の特徴

- 安曇野市は、高山帯から平地まで広域な標高帯をカバーする（大天井岳 2,922m～明科 497m）。自治体レベルで、これだけの標高帯をカバーする極めて希少な事例といえる。安曇野市版レッドデータブックの作成と活用は、幅広い植生帯を一括して保全・維持の対象とするモデルケースになると思われる。
- 安曇野市は、東西日本が独立してユーラシア大陸から起源したその境界域に位置しており、日本国内でも有数の断層（糸魚川-静岡構造線）が縦断している。北米プレートとユーラシアプレートが接し合う地域でもある。このような地史から、起源の異なる生物系統が会う場でもあり、生物多様性の世界的ホットスポットといえる。日本列島における最重要地域である。
- スナヤツメ（準絶滅危惧）、アカハライモリ（準絶滅危惧）、オオコオイムシ（準絶滅危惧）や、レッドリスト種ではないものの、チラカゲロウやカメノコヒメトビケラ類の遺伝子解析の研究では東日本と西日本の系統が、松本・安曇野周辺（糸魚川-静岡構造線）で二分されていることが明らかである。
- トノサマガエル種群の分布域の解説。東日本に生息するトウキョウダルマガエル（準絶滅危惧）と西日本に生息するナゴヤダルマガエルの分布界域も、やはり松本・安曇野周辺である。現在では、トノサマガエル（準絶滅危惧）との間で交雑が生じている。

### b. レッドデータブックの活用について

- 安曇野市版レッドデータブックの英語版アブストラクトの発行は、他に例がない安曇野市だけの取組である。在住外国人、海外からの観光客へもアピールしても良いと思われる。

## 8) 那須野 雅好 様（昆虫担当、環境教育にも携わる）

### a. 守りたい生物

- 安曇野市では 252 種の昆虫が選定され、その中の 37%が蝶類。蝶類では、絶滅種 3 種、絶滅危惧 I 類 14 種。絶滅種・絶滅危惧 I 類の中の 93%が草原性の蝶である。例えば、オオルリシジミ（絶滅危惧 I 類）、ヤマキチョウ（絶滅危惧 I 類）、ヒョウモンモドキ（絶滅）
- 人間のライフスタイルの変化、農業の機械化で、多くのレッドリスト種が激減した。

### b. 今後の課題

- 官民一体となって息の長い活動を欠かさずにやっていくしかない。

### (3) 質疑応答・意見交換

- **来場者**：苦労して在来種を守る、外来種を排除するのは大切ではあるが、現状で6から7割の生物が外来種に侵されていることから、現実を受け入れざるを得ない状況が近づいているのではないかと危惧している。その点について、お考えをお聞きしたい。また、そのようななかで、我々ができることは何なのか、助言をいただきたい。

- **吉田様**：次世代に引き継ぐため、在来種を守ることを我々が放棄してはならない。やるだけのことはやらなければならないと考える。

-----

- **来場者**：我々の生活スタイル、生きもの、自然環境、この3条件がうまくかみあわないと、絶滅危惧種を守るにも限界があると考え。そのためには、自然保護について、どのように我々が若い世代に引き継いでいくかが、最も重要であると思われる。山里や森林も荒廃がすすみ、農業の担い手も減少している。そのような中で、生きものが生息できる自然環境を守るためにはどのようにすべきか、お考えをお聞きしたい。

- **浅川様**：まず、私たち自身がそこに何がいるのかを明確に知ることが大事である。方法としては、例えば、極力除草剤を使わないなどの方法があるが、大変労力がかかることである。その対価として、農作物を販売する場合は何らかの付加価値をつけることも考えられる。JA含め知恵を絞って考えれば、何か方策が出ると思われる。

- **飯沼様**：現在、NPO 団体で活動をしているが、そのような活動のなかでつながりができ、情報を共有することができる。行政、市民が協力し、次世代の子どもたちに今の情報を提供していかなければならない。かつては、農地保全のため薬剤を使わずに必死に草刈り作業をした。現在、危機的な状況にある生物については、守る努力をしなければいけないと考える。

-----

- **来場者**：5年前に大町市の鷹狩山に展望公園を作ることになった。その際に刈払いをしたところ、なくなっていたササユリが復活した。里山は人の手が加わることで維持管理される。人の手を加え維持管理を続けていかないと、貴重な自然の姿が消えてしまうと思われる。

- **那須野様**：生物が生息する元となるのが植生である。在来種の植物が覆っている部分では、外来種が生えにくい。現在残っている自然を守っていくことをどこかでやらなければならない。マンパワーの問題もあるが、国営公園のなかでの保全も検討されている。皆で知恵を絞って方策を考えていくべきと考える。

また、オオルリシジミのように絶滅に瀕しているような生物については、手をさしのべるべきと考える。同じ種でも、遺伝的要素が違う。安曇野市の種を、皆で一緒に守るという意識が市のなかに必要な。安曇野市内には白いチョウが8~9種類も存在している。一見すると皆モンシロチョウに見えるが、発生する時期、食べる植物、生息環境、すべて違う。それらを理解するために、生きものや自然に興味関心を持つ人々をたくさん育て、市民の関心を高めていきたいと考える。

- **中村様**：絶命の危機に瀕している生きものを守るには、かつての農業技術を参考にするなどして、生きものが生息できる環境を作りだしていかなければならない。誰が、どのようにそれを作るかは、今後の大きな課題である。子どもたちへの環境教育も今後重要になってくると思われる。
- **東城様**：生物の保全のために、我々がどれだけ関われるかは今後の課題である。生物多様性を保全するため、どれだけの人（労力）と資金を投資できるかということも考えていかなければならない。レッドデータブックができたことは、ようやく、そういったことを考えるうえでの土台ができたと考えている。つまり、レッドデータブックの作成は、ゴールではなく、スタート地点にたったと考えるべきである。これからレッドデータブックをどう使っていくかが重要である。

- 
- **中村様**：（パネルディスカッションまとめ）レッドデータブックをベースにして、今後どのように自然環境を守っていくべきか議論していければと考える。また、このようなシンポジウムを安曇野市主催で開催したことも、非常に意義深いことであると考える。安曇野市に「環境保全課」のような部署を設け、官民一体となって自然環境を守っていければと考える。



基調講演



パネルディスカッション



パネル展示の様子



生きもの情報の収集